資料

なぜ幼児は「森のようちえん」で枝を拾うのか

—幼児の行動記録を手がかりに—

梶浦 恭子*・今村 光章**

岐阜女子大学*・岐阜大学**

Why Do Children Pick up a Branch in the *mori-no-youtien* (Waldkindergarten:Forest Kindergarten), and Why Do Children Play with a Branch ?
: Records on Behaviors of Children in the Forest

Kyoko KAJIURA *, Mitsuyuki IMAMURA **

Gifu Women's University *, Gifu University **

(受理日 2014 年 12 月 1 日)

I 課題と目的

森のようちえんでは、多くの幼児（3－6歳）が、木の枝や石や砂、粘土、草花、木の実などの自然物に触れる。とりわけ、筆者らが実践し、訪問する森のようちえんでは、樹木が生い茂り、地面には木の枝が多く落ちている。そのため、森のなかで、幼児は必ずといっていいほど、枝を目にし、手にする。（本資料では、枝とは、樹木から離れて地面などに落ちている枝を指す。根とつながった樹木の一部としての枝ではない。）

ところが、幼稚園や保育所では、幼児は自ら枝を拾って、自由にその枝で遊ぶことはできない。なぜなら、枝のような自然物は園庭にほとんど見あたらないからであり、園庭の樹木から落ちてきた枝も取り除かれることが多いからである。しかも、幼児が枝を手にして振り回すと、たいていの場合、保育者はそれを制止する。枝を自由に持って遊ぶようなことは、危険なために、ほとんど許されない。

実際、幼稚園や保育所では、幼児が枝を手にすることは少ない。他方、森のようちえんでは、幼児は枝で遊ぶ。そこにどのような意味が隠されているのか。本資料においては、森のようちえんで

は、幼児がどのように枝を拾い上げるのかを詳細に記述・分析したい。そして、その理由と意味について考察し、幼児期の環境教育を構想するための手がかりとしたい。

また、本資料には副次的な目的がある。それは、幼児期の環境教育としても位置づけられる森のようちえん活動における幼児の行動記録を詳細に示すことである。なぜなら、森のようちえん活動の様子を詳しく報告した論文が数少ないからである。もちろん、皆無ではない。例えば、中西ら（2010）は、自然を取り入れた保育体験において、自然環境にさほど馴染みのないA男が、他者との関わり方をどのように変容させたかについて、その変容の過程を追っている。また、小笠原・前田（2009）は、野外の保育実践の振り返りを通じて、外界を感じる身体感覚と、身体を調整する力の未熟さと拙劣さを保持した幼児4人の育ちを整理した。その上で、個々の発達に合った野外の保育方法や配慮を検討している。さらに、中坪ら（2010）は、細い木という森の自然環境が、幼児にさまざまな行為をもたらし、遊びを実に豊かなものに行っていることを指摘した。他にも森のようちえんの実践事例の報告や訪問記はある。

しかしながら、幼児が自然物を持ったり、それ

問い合わせ先 今村光章 〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 岐阜大学教育学部 E-mail:imamura@gifu-u.ac.jp

で遊んだりすることに着目し、加えて、それに關する行動を詳細に記録し、分析した先行研究は少ない。そこで、本資料では、幼児の行動について具体的な行動記録を作成して、幼児の行動を理解し、分析を深める手がかりの一助にしたい。

以下では、研究方法を示し（Ⅱ）、その結果を示す（Ⅲ）。そして、総合的な考察を行う（Ⅳ）。本資料の提示が、森のようちえんの保育者や研究者ばかりではなく、幼児期の自然遊びを再考する契機となればと願っている。

Ⅱ 研究方法

本資料の研究対象は、近畿地方の滋賀県の「S 森のようちえん」である。この園を2012年8月から2013年8月までの間、週1回程度訪問し、継続的に観察した。

研究対象とする対象児は、4歳児3名、3歳児2名、2歳児3名の合計8名（2012年8月当時）であった。保育時間である9時30分から降園時間である14時30分までを観察時間とした。その間、幼児の行動記録をとるとともに、幼児が枝を持つシーンについては、随時、気が付く範囲内でカメラでの撮影を行った。

1回の訪問日につき8～10の事例の収集ができた。そのなかで、幼児が枝を持つ要因を明らかにするため、本資料においては、2012年11月の3日間の男児S児（当時3歳2カ月）の3事例のみを集約して分析する。

S児を対象児の事例提示とした理由は2つある。第1の理由は、当時3歳になったばかりで、森のようちえんは3日目の経験者であるため、極めて幼児初期段階の自然体験者のデータとなると考えられた。集団生活にも、新たな場所という条件にも、ありのままに自己表現する期待がもてるからである。第2の理由は、予備観察時において、木の枝の接触回数の数値が、8人のなかでS児は最も高かったからである。

Ⅲ 結果

幼児が森で活動する記録と写真を手がかりにして、木の枝を持つ手の動きに注目して事例をまとめておこう。2012年11月の3日間の調査によれば、

幼児が手に触れる森の自然物は、合わせて27種類あった。森のようちえんに通う幼児は、多様な自然物に日替わりで出会っていると言える。また、幼児が特によく触れる自然物は、枝や木の根っこであることも明らかになった。それについては別途、報告する。本資料では、このS児の3つの事例を取り上げ、その特徴的な行動の分析を行った。

1 3事例の行動記録と考察

1) 事例①「枝を何本も持ちかえ唇に引き寄せる」【概要】

登園したS児は、キイチゴを摘んでいる保育者のところに直行する。朝露で赤く光るキイチゴに魅せられてつまみ、そっと味わう。指腹に実をやさしく挟み、立ち上がり振り返る。キイチゴを母親にあげようと周りを見渡すが、母親はいない。S児は涙顔になる。保育者が声をかけると気持ちを立て直し泣かずに持ちこたえた。

森に集まった幼児8名と、保育者（補助スタッフ含め）3名、学生2名と観察者1名の大人6名が加わった14名による朝の会が行われた。それぞれの幼児が何をして遊びたいのかが話し合わせられ、一日のおおよその流れが決められた。

相談を終えた5分後、S児は、森の入口で立ち止まる。3本の枝を、1分の間に拾う。

【写真から見る枝の特性と手の動き】

10時23分（写真①-i）、S児は、森の遊び場へ向かう道で、落ちていた枝を見つけ、拾い上げ、向かい合わせにいる保育者に見せようとして手の平を広げる。枝は、幼児がなんとか扱うことができる自分自身の身長程度の長さである。

写真①-i
1本目の枝
10:23

枝の太さは、軽く握れる直径約1.5センチの細い枝である。保育者に紹介するように見せて微笑む。

写真①- ii
2本目の枝
10:23

数歩も歩かないうちに、1本目の枝は捨て、違う枝を見つけて手に持つ。枝分かれした枝を下から腕で抱えるようにして、指先で持つ。枝全体を横に寝かせて抱える。

この枝は1本目の枝よりやや長めで、枝は分かれ、波打った形の枝である。枝の太さは直径約1.5センチの細い枝である。

写真①- iii
3本目の枝
10:23

写真①- ii とほぼ同じ場所で、3本目の枝を自分で見つける。1本目よりは長く、2本目より枝の曲がり方が目立つ。両手の手の平を上に向け、どう曲がっているかを確かめるように、左手はすべての指を枝に密着させて握る。枝は細く、長さは身長程度である。

写真①- iv
枝を両手で握って歩く
10:23

写真①- iii 直後に、遊び場の方向に歩く。歩きながら枝を持つ。くの字型に曲がった枝のバランスをとるように持つ。幼児の右手と左手は間隔を離して握る。枝は、写真①- iii と同じである。

写真①- v
くちびるに枝を引き寄せる
10:23

写真①- iv 直後に幼児は足を止める。横に持った枝を、そのまま縦向きに起こして持つ。すぐさ

ま枝を幼児の身体に引き寄せたかと思うと、幼児のくちびるに触れるところまで枝を近づけている。枝は、写真①- iii と同じ、細い枝である。

【考察】

写真①- i, ii, iii でわかるように、幼児は、他者から指示されたり誰かの真似をしたりして、森の道に落ちている枝を拾うのではない。幼児の意志で拾う。幼児の身長ほどの長くて細い枝を、横に寝かせ腕に抱え、1本の枝を右手は下から持ち左手は上から握った(写真①- iv)。幼児は軽さ、材質、屈折した形状といった枝そのものの特徴を、受容しながらあれこれと手を動かして試している。

顔に木の枝をぐっと引き寄せ(写真①- v)、手だけでなく、ほお、唇にまでに及んで、枝の丈夫さ、堅さや肌触りといった質的な感触を味わっていると考えられる。枝との親和的な関係性を築こうとする幼児の主体的な動きとも見取できる。

2) 事例②「枝が昆虫に見立てられる」

【概要】

幼児は、事例①にひき続き、その日拾った4本目、5本目の枝2本を両手に持つ(写真②- i)。2本の枝はわん曲している。保育者は、終始笑顔でS児の様子を見守る。

【写真から見る枝の特性と手の動き】

写真②- i
あれっ、枝が×(バツ)だ
10:26

枝の長さは、幼児の身体の上半身程で、手のひらで十分に握れる太さである。偶然に枝が重なったときの形にひらめいた様子で、保育者に重なる形を見せる。

写真②- ii
手首が内に向き、
枝は昆虫の顎？
10:27

幼児は少し長めとも思える枝を使って、手首を内側に向けて握って、左肩を高く斜めに傾ける。枝に操られてダンスをするかのように身体が傾く。写真②-iでは、2本の枝は偶然に重なるが、写真②-iiになると幼児は、意識して枝を動かし、2本の枝で何かを創り出そうとした。その形の面白さを、再び保育者に見せている。

写真②-iii
手と目で集中
10:27

幼児は「くのかたち」とつぶやく。幼児は短く枝先を持つ。枝先一点に気持ちを集中させて、2本の枝で「く」の文字の形をつくろうと試みる。枝2本は写真②-i, iiと同じ枝である。

この後、保育者は、4歳児集団に合流するためにも広場へ行くことをS児に伝える。するとS児は枝をあっさりと手放して広場に向かった。

【考察】

事例②は、事例①とは違い、3場面とも同じ枝で、枝を両手に持つ。日常生活や遊びに、枝のように長い物を両手で持つという経験はないと思われる。幼児の手はどこかぎこちない。また、曲がった形の枝を持つ手は、枝2本を動かしているうちに、いつしか重なる。無意識のうちにともいえる枝を持つ手の動きが、上下に揺れ、互いの枝先が触れ、×（バツ）の形の出現となる。少し長めの2本の枝を持ち、創り出された形に幼児は、気づき、発見したことが、新たな遊びのきっかけとなっていく。

写真②-iiで、幼児は首をかしげ、左手の肘が上がり、2本の枝先は浅く重なる。幼児はクワガタの大顎がひらめいたようだ。幼児は身体を傾け、昆虫クワガタと化して、イメージした顎の部位を保育者に紹介した（写真②-ii）。直後、S児の意識は枝を交差させたまま、「くの子」と言い、その表現は、新たに幼児自身の経験知から想像す

る文字の形であった（写真②-iii）。枝先を短く持ち、手の平から指先に力をずらして枝を握り、「く」の形づくりに集中して動かずにいる様子がわかる。

以上のように、遊びを順に変化させる過程では、枝を握る力加減や握る位置が変化し、枝を持つ幼児との距離も近づく。枝を持つその時その場面ごとに、幼児は枝と遊ぶ面白さを見出し、気づき、つぶやくように言葉にする。だが、夢中になると、一点集中で無言となり静止する。

S児は、長い2本の枝を持った時、枝を持つ手の動きにまかせた。枝が偶然に重なった遊びの面白味のある火種を見出した。そこから、枝を自由に变化させ、遊びを生み出した。その後、S児は、独自の世界に入ろうとしているようにみえた。

事例①では、枝を物として受け入れ、枝の特性を熟知し、試すための探索の段階であった。それに対し、事例②では、幼児は、枝の特性を受け入れつつも、思うように動かし、見立て、遊びを生みだした。用い方によっては、枝は集中して遊べる1つの玩具としてみなせると考えられる。

3) 事例③「遊びを見つけ出す」

【概要】

お昼頃、S児は、同じ2歳児のK子と広場からトイレに向かう。2人は木の茂みに動く気配を感じた。枝が交差するその向こうにバツをみつける。

手を伸ばすと、枝先が指を突く。バツを追い、手に入れると、細い足を指先でつまむ。幼児は、バツが、草花のセイタカアワダチソウとクローバーを食べるのかを、実験するかのように口元に近づけ、虫の動きを見つめ続ける。

その後3、4歳児（5名）が遊びをはじめている黄金池へ向かう。

【写真から見る枝の特性と手の動き】

S児は、数分前の小さな虫の静かな空間から、一変して、年長児の躍動感ある動的な世界を見る。

写真③-i
枝に指をからめてまわす
12:40

3, 4歳児は、道具（ノコギリ、ハサミ）や枝、竹などを手にして、加工したり並べたりと、それぞれの身体が忙しく動く姿が目に入る。S児は、今ある状況を調整するかのように、しばらく若い生の樹木の枝に指をからめ、静止して、年長児の動きを目で追う。

写真③-ii
見つけた枝（葉っぱ付）を揺らす
12:43

3, 4歳児が遊ぶ空間をS児は横断する。足元にある緑の葉がついた木の枝を見つけ、拾い上げる。持つと揺らす。森の木々に向かって枝葉を揺らす。上下に揺らすたびに、幼児の固い表情がほぐれていった。枝葉の特徴は、幼児の腕の長さほどで、手ごろで持ち易い。

写真③-iii
枝葉振りは他者観察と自己みつめ
12:43

身体向きを変えたS児は、遊ぶ3, 4歳児に向き合う態勢で枝葉を振る。葉っぱの先は、3, 4歳児（彼方）の世界に向けている。3歳児女児と4歳児男児は、おうちごっこをするという話がこの日初めて持ち上がり、交流が始まったばかりであった。そのため、わき目もふらず、それぞれが役割をこなし、手も身体も活発に動いている。彼らのごっこの世界は誕生したばかりで、活気づ

いた会話が時々聞こえる。S児はその風景を、見ながら続けて枝葉を振る。

写真③-iv
枝葉を振り幼児の表情がもどる
12:43

枝葉を振る向きを、3, 4歳児の集団から斜め方向に逸す。S児は枝葉に向き合い、腕を伸ばし上下に振る。葉っぱの揺れる動きを見るS児は、写真③-iの時よりも口角が上がり柔らかな表情となる。

写真③-v
揺れる枝葉は釣りざおになる
12:43

3, 4歳児の集団を背中にし、腕を伸ばし、枝を上下に振るうちに、「ダイオウイカ釣って」、「クジラ釣って」、「イカとタイを捕ったよ」と、まるで目の前に保育者以外のだれかがいるように、おしゃべりがはじまる。枝は釣りざおに見立てられる。

写真③-vi
遊ぶ場所が決まり、「ぼくはサラダやさん」と宣言
12:43

3, 4歳児のおうちごっこの真正面にある丸太のベンチを、S児はサラダやさんの場所に決めた。おうちごっこで夢中になる4歳児に、S児の始めた行動は見えていない。

写真③-vii
釣りざお（枝）は手放し、ごっこ遊びがはじまる
12:43

S児は、遊ぶ場所を自分の判断によって確定した。その時、釣りざおの役目を終えた枝を地面に置いた。

【考察】

写真③-iで、指を枝に絡めるという幼児の手の動きが何を示すのか。それは、目の前で展開する3、4歳児らの行動追跡であったと推測される。S児は、身体を静止させ、想像力を働かせ、遊びの内容を知ろうと集中している。

その後、S児は、足元にあったという理由で、葉っぱ付の枝を手を持ったように見えた。だが、手首や腕で枝を振るという動きが生まれ、幼児は枝のしなりや葉の揺れる動きに意識を集中させる。すると、イメージはふくらみ、S児は落ちていただけの枝を釣りざおという道具に見立て、遊びに利用していったのであった。

枝葉を上下に振って、枝先の向きを仲間集団から斜めに逸し、さらに仲間を背にしたS児の行動は、観察時点で、理解しにくいものであった。S児においても、葉がついた枝で、はじめからしたいことが決まっていたのではなく、枝葉を揺らし、しなる枝の特徴を感じとり、考え、その時の発想を自分なりに方向づけていったと推測する。

こうした幼児の手の使い方は脳の発達と密接にかかわっている。手を道具として使う時は、頭で考えることが必要なので、考える働きをする前頭連合野が働く（久保田 1988）。S児は、つぶやきながら枝を釣りざおに見立てた。枝が手の延長であると考えらるなら、釣りざおは手の一部である。S児は、釣りながら、釣った魚の名前を言葉で言い表して現実感を漂わせた。すると、S児は、魚をサラダの具材と結びつけて想像をめぐらせ、サラダやさんという名の遊びを考えていった。

手を道具として使う時は、思考が働き、前頭連合野が巨大になって、脳領域（感覚野、感覚連合野、小脳、運動野）が働く。どんな手の使われ方であっても、手の感覚の記憶は、感覚野や感覚連合野に、考え方の記憶は前頭連合野に、運動の仕方の記憶は主に小脳にというように、脳を働かせる場所ごとに記憶が残るという（久保田 1988）。このように、幼児は、手を思うように動かすこと

によって、感覚器官と運動器官の脳領域を発達させる。動かし方についても、記憶を蓄積していく。そのため、感じ方、考え方、使い方が徐々に重ねられて習熟する。つまり、S児の手のこなしにおいて、道具の扱いが熟達していくと考えられる。

また、目の前で3、4歳児が活発に行動して遊ぶ様子は、イメージをつくる刺激になり、S児の気持ちに大きく影響を与えていったと推測される。

Ⅳ 総合考察

S児の3つの事例の記述と考察から、仮説的に、幼児が枝を持つ理由は3つあると考えられる。それを順次みていこう。

久保田（1985）は、「手の皮膚は、他の皮膚と比べて受容器の種類が一番多く、触、圧、振動、温などの5種類以上の感覚がある」という。では、森に点在する枝を視覚でとらえ、持ち、握るとき、幼児は何を感じるのだろうか。

2歳児の幼児が持つ枝は、事例①では、背丈よりやや長い枝や分岐した枝、くの字に曲がった形の枝であり、長さや形状に特徴があった。1分間に触れた枝3本や、他の事例の枝においても、幼児が、同一で揃った枝を持つことはなかった。

また、長い枝を腕で抱えたり、曲がったところを手のひら全体で握ったり、顔近くに枝を引き寄せるなど、心地が良いのか、親和的な受け入れ方と見てとれる。まるで、幼児は枝と一体化しようとしているかのような動きであった。

さらに、幼児は、手首程の太さや背丈の倍ほどになる枝にも手を伸ばした。幼児は、樹皮にごつごつと凹凸があるような枝や、両手で引っ張り出さないといけないような重い幹も持った。幼児は、一様ではない枝を直接手に取り、堪能するまで手の感覚器官で感じていた。触れ、握った枝の感触の心地よさや面白味、不思議さなどを「受容」していたと考えられる。

以上のように、幼児が多様な枝をとりかえて試行錯誤する動きをするのは、枝の特徴を手という感覚器官で「受容」し、触れて、感じ、枝の本質を知ろうとする「探索」行為を繰り返しているからであると考えられる。

一方では、幼児は、「こっちの枝はどんな枝かな」と重さや堅さや形を肌で感じ、「この枝は曲がっているな」と見て感じ、持ち歩き、移動し、立ち止まり、そして1分間に、順手、逆手、のぼり棒の持ち手と、器用に持ちかえている(事例①)。

幼児が物を使って遊ぶことについて、無藤(1997)は、「その物に触り、その物の特性にふさわしい動きをする」という。また、「その物自体の質感と、その物の特徴(特質)に見合った動きの心地よさである。さらに、遊びに現実感・実在感(リアリティ)を与えている」という。つまり、幼児は、枝を持って動く瞬間ごとに、枝との関係性を持って、動きや感覚の印象を記憶にためている。たとえ短い時間であっても、いつ、どこでも、枝を持つと遊びの「芽」が吹き出し、手や指、手首の動作が繰り返される。素早く握ったり、枝を持つ手首や腕の角度を変えたりと、枝に操られてダンスをする動きも広がる。自由でリズム感ある心地よい動きを繰り返すこともあった。

例えば、枝を持って歩くこと(事例①)や、枝2本を偶然に重ねたこと(事例②)は、持った枝に応答し、幼児の独自性をもった動きが生まれ、そこから遊びが「発祥」していることが見出せる。その時々瞬間に浮かぶ幼児の思いをかなえるかのように、幼児ならではの遊びを次々と誕生させていると読み取れた。枝は、幼児と応答し、さまざまなものへと見立てられていった。

したがって、幼児は枝の特徴である形、重さ、堅さなど同一ではない枝を握って、枝を重ねる動きや枝を振る応答性をもった枝の特徴にふさわしい動きをすることを考えられる。そのことによって、幼児に新しい遊びの「芽」が生まれた。2本の枝を持ちそれを振ると、枝の動きが幼児の想像をかきたて、現実にある文字や生き物の形に見立てて印象づけられ、実在感ある創造遊びが幼児によって展開されていった。

以上のように、枝は、遊びの「発祥」点となる役割を果たし、幼児の創造力を高める可能性を秘めているものと考えられる。だから幼児は枝を持つ。これが第二の理由である。

もう一つ、幼児が枝を持つ理由を考えてみよ

う。幼児は、森の地表に落ちている枝を無秩序に拾うように見えるが、例えば、形が気に入らないとか、折れそうで貧弱な枝だと、手離すか始めから拾わない。反対に、気に入ると、動かし遊ばせ、なじませ、しばらく持つ。幼児は、気に入った枝を遊びに使う何かに見立てたり、始めから使える枝を探して持ったりして、そのたび毎に、手さばきを少しずつ習熟させていった。つまり、枝を玩具として使い、身(手)のこなしが上手くなって、身体知(無藤 1997)が発達していくと考えられる。

S児は、身長より長く、重くて存在感のある枝でも持ち上げようとする。また、枝を振って遊ぶうちに、しなる枝の特徴から、S児は釣りざおを想像し見立てる。釣りざおに見立てた枝を振るたびに、ダイオウイカ、クジラ、タイを釣り上げた。枝は、S児がくり広げはじめた遊びに価値ある道具となっていった。幼児の観察やその読み取りを怠ると、思いもよらない行動だとか、つじつまが合わない発想やイメージではないかと思える。だが、枝にふさわしい動きをS児なりに進め、枝を玩具として用いて動くのである。

無藤は、物を媒介にすると、「人とのやりとりも成立する」と述べる。仲間とつながるきっかけが、枝にもあるといえるのである。枝を釣りざおにしたS児の遊びは、釣った魚を具材とし、サラダやさんになった。S児は、手の平に入る石と、包丁サイズの枝を握り、手や指は小刻みにテンポよく、サラダを創る人のようにふるまった。それは、1人で、独自の行動であった。それでも、S児は、保育者が関係性を仲介することの多い2歳児である。それにもかかわらず、このときは、周りにいる2歳児女児が振り向き、自分から近づいた。S児は、魚を石に、包丁を小枝で見立て、忙しげに魚をさばき、お皿に盛るしぐさを独自のイメージでサラダやさん遊びを進めた。楽しげに、石や枝を軽やかに動かすS児のしぐさが、同年齢女児に、関心をもって見る態度を引き起こしたとも考えられる。S児全体の動きの背景には、枝を手自由に操作し、活発に動く憧れの4歳児男児3人と対等に、仲間として動きたいと願うS児の素朴な欲求が、そうさせていると推測する。

以上のように、幼児は、枝を、遊びを成立させるのに必要な一道具として見立て、それを「玩具」として用いた。徐々に、幼児の身体や手において、遊びの内容にふさわしい動きが表現されていった。

要約しておこう。

第一に、幼児は、触覚器官を用いて枝を「受容」し、枝の特徴を「探索」する。第二に、枝を持てば持った枝にふさわしい動きや遊びがはじまり（「発祥」）、行為から生れる発想を形状化し意味づけられ展開する（「創造」）。第三に、枝は、幼児の心身の動きや遊びに柔軟に応じる「玩具」として使われる。さらに、本資料だけでは言い切れないが、枝は仲間とかかわりを持つ契機となる道具とも考えられる。

V おわりに

以上のように、幼児が枝を持つ理由を考察した。この仮説的な理由が妥当なものかどうかについては、慎重に今後の検証にゆだねたい。だが、このように幼児が枝を手にする理由を考察することで、幼児期の環境教育に関する一定の示唆が得られるように思われる。

一般に、大人が作った玩具で幼児が遊ぶ場合、その玩具の主たる選択の権利や制作過程の手順も大人にあり、遊びの方法も限られている。しかし、森のなかで幼児が出会う枝を選ぶ決定権は、幼児自身にあり、その遊び方も幼児が決定できる。仲間と一緒に遊ぶことも幼児相互の意思による。遊ぶ物、遊び方、仲間とかかわる主体は幼児である。枝を持つという主体的行為を肯定するところに、幼児期の環境教育への示唆があるように考えられる。

また、枝という森ではありふれた自然物は、幼児の想像力を高め、遊びを発祥させ、仲間との関係性を芽生えさせる。その意味では、非常に重要なものであるとも言える。だが、昨今では、こうした自然物である枝に幼児が触れ合う機会が多いとはいえない。冒頭に述べたように、幼稚園や保育所では、幼児たちには、大人たちがふさわしいと考える環境の下で、成長・発達にとってよいと

考えられているものだけを与えられているからである。そのなかに、枝は含まれてはいないだろう。だが、幼児が自分で枝を発見し、それを振り回し、玩具に見立て、仲間と共に遊ぶということに、案外、教育的な意義が多く隠されているとも言えるだろう。

本資料においては、残念ながら、自然物で遊ぶ意義を明示したり、理論化したりはできなかった。幼児一般の行動との比較も実施できなかった。それでも、本資料が、森のようなちえんばかりではなく、幼稚園や保育所でも、自然物で子どもが遊ぶ意味を再考する契機となれればと願う。また、広い意味の幼児期の環境教育の充実のための布石となることを願っている。今後、さらに事例の幅を深め、自然物と幼児とが出会う意味について考察していきたい。

引用文献

- 久保田競, 1985, 『手のしくみと脳の発達』, 朱鷺書房, 大阪, 226pp.
- 久保田競, 1988, 「人間にとっての手」, 『発達』, 33: 1-12.
- 無藤隆, 1997, 『認識と文化2 協同するからだとことば: 幼児の相互交渉の質的分析』, 金子書房, 東京, 205pp.
- 中西さやか・中坪史典・堺愛一郎, 2010, 「森の幼稚園カリキュラム」における幼児と自然との相互作用に関する研究—他者とのかかわりにみる幼児の変容プロセス—, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第三部 教育人間科学関連領域, 59: 167-174.
- 中坪史典・久原有貴・中西さやか・堺愛一郎・山元隆春・林よし恵・松本信吾・日切慶子・落合さゆり, 2010, 「アフォーダンスの視点から探る森の幼稚園カリキュラム: 素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか」, 『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 39: 135-140.
- 小笠原明子・前田泰弘, 2009, 「野外保育による幼児の「育ち」の支援」, 日本保育学会, 保育学研究, 47-2, 121-131.